

BOOK REVIEW

『企業中心社会を超えて』

—現代日本をへンジェンダーで読む—

大沢 真理 著

本書は、本格的な実証的フェミニズム社会科学の書である。これまでの日本におけるフェミニズムによる研究は、実証的研究に進むことなく、思想的哲学的レベルでの抽象的理論的議論が論争的議論（たとえば「家事労働論争」「アグネス論争」等）に終始してきた。従来の実証的な女性労働研究においても、フェミニストの議論が十分にふまえられてきたとは言い難い。こうしたなかでの本書の登場は、フェミニズムを現代日本に生きる者に共通する現実の問題として議論することを可能にした点できわめて重要である。

本書は、フェミニズムと実証的研究とを結び付けたということにとまらない。著者の大沢氏は、社会政策・ジェンダー研究を専門とする研究者であり、本書もこれまでの労働経済学の諸理論を批判的に援用しな

がら、これまでのフェミニズム論に鋭い批判を加えている。

上野千鶴子氏に代表されるいわゆる「マルクス主義フェミニスト」は、従来のマルクス主義が近代社会における支配構造として階級支配だけを考へており、「階級支配一元論」であると批判した。また、ラディカルフェミニズムに対しては、「性支配二元論」であると批判を加える。それらに対して「マルクス主義フェミニスト」は、階級支配と性支配、すなわち「資本制」と「家長制」との二つのメカニズムによって近代社会における支配が貫徹していることを主張する。「資本制」すなわち資本賃労働関係においての支配関係は「市場」を通じて貫徹し、「家長制」すなわちジェンダーとしての男による女の支配は階級支配・資本制のおよばない外圍である生命の再生

産の場「家族」を通じて貫徹しているとする。しかしながら、「マルクス主義フェミニズム」においては、「資本制」と「家長制」とが完全に独立変数として扱われており、二つのメカニズムがどういった関係で（そしてどういった場で）近代社会の支配構造として機能しているのかが明かではなかった。

それに対して本書では、従来の諸議論では「資本制」の機能する場としてとらえられてきた企業内の労働管理、社会保障政策体系のなかに、「家長制」が貫徹していることを主張する。つまり「資本制」の構造そのものが「家長制」であると主張するのである。その方法も労働経済学・社会政策学の先行研究をふまえて実証的に分析しており強い説得力をもっている。本書のこの実証の力強さによって、これまで「家長制」に十分に自覚的でなかった者も議論の中に引き込まれざるをえない。

農業分野では、男性の農外就業が深化したために農業生産・農村社会の担い手としての女性が、これまで以上に注目され、その地位向上が主張されている。しかしながら、農外就業における女性労働の評価の低さが、女性を家庭に残している構

造そのものであるならば、その構造のなかで「残された」女性労働力を「担い手」として想定して、その地位向上を唱えるだけでは何も解決しないのである。本書の主張を農業分野でも正面から受け止め、経営の論理を超えて、ほんとうに女性の解放に向かう方向を模索する時期に来ている。現代日本の「企業中心社会」を何とかしたいと思うすべての方に本著を薦めたい。

なお、季刊『窓』（窓社）誌上において、大沢氏とジュリエット・シヨアー氏（アメリカにおける働きすぎを克明に分析した『働きすぎのアメリカ人—予期せぬ余暇の減少』窓社の著者）との「家事労働はなぜタダか」と題する往復書簡の連載が始まった。興味のある方は、あわせて読みたい。

（時事通信社発行

一九九三年八月刊

一、七〇〇円（消費税含）

評者

東京農工大学大学院

連合農学研究所

博士課程 河添 誠